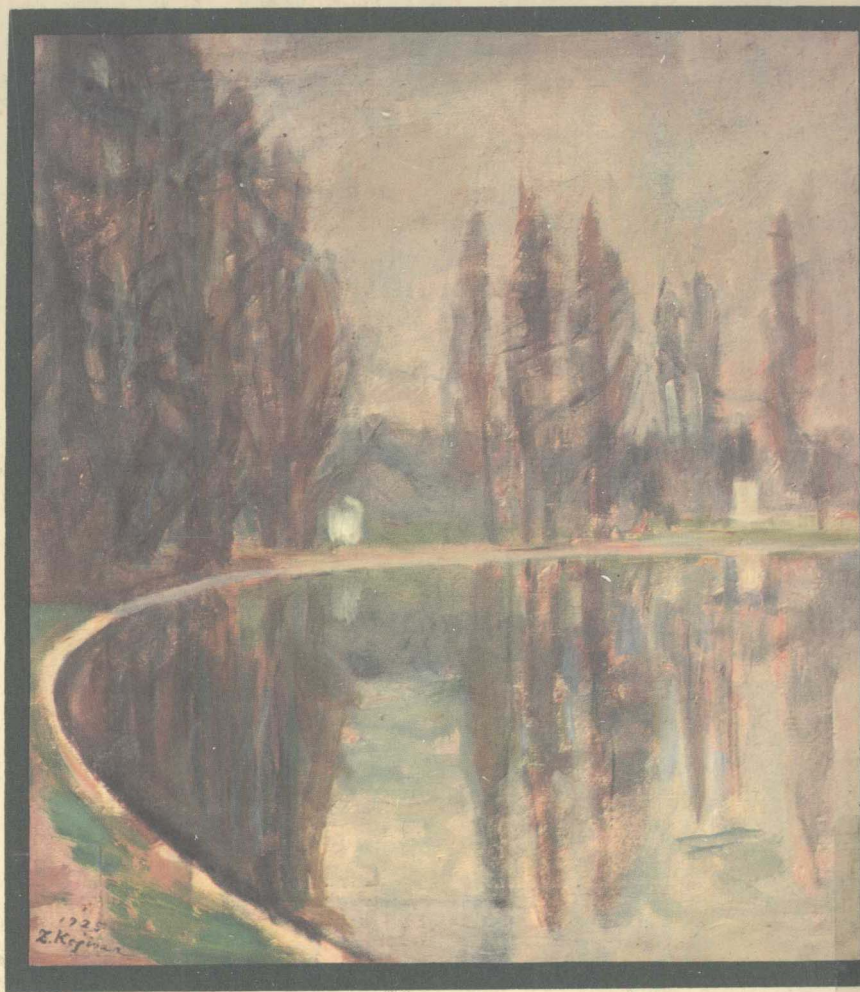


巴里、微笑



小島善太郎

巴里の微笑

著者略歴

明治25年(1892) 東京都新宿区淀橋に生まれる。
明治43年(1910) 大正洋画会, 日本美術院, 葵橋洋画研究所等にて学ぶ。
安井曾太郎氏に師事。
大正9年(1920) 東京都主催美術会にて「やわらかき光」受賞。
大正10年(1921) 大正博覧会にて「四ッ谷見附」受賞。
大正11年(1922) フランス, イタリアにて絵画研究。
大正12年(1923) パリ, サロン・ドゥ・トゥンヌ展に入選。
大正14年(1925) 帰朝す。
大正15年(1926) 同志5名と1930年協会を創立。
昭和5年(1930) 同志14名と独立美術協会を創立。
昭和7年(1932) 世田谷区下馬より, 八王子市丹木町に転居。
昭和42年(1967) 東京純心学園短大教授となる。
昭和44年(1969) 自伝「若き日の自画像」を出版す。
昭和46年(1971) 八王子市より日野市百草に転居。
昭和53年(1977) 読売新聞社主催「多摩に生きて五十年展」。
昭和56年(1981) 青梅市に市立「小島善太郎美術館」建設決まる。

巴里の微笑

定価 1,500 円

昭和56年7月20日印刷

昭和56年7月25日発行

著 者 小 島 善 太 郎

1981 © Zentaro Kojima

発行者 高 橋 勝 嗣

発行所

株式会社

雪華社

郵便番号 101

東京都千代田区神田錦町2の9

電話 (294) 7597

製本 (株)美成社

印刷 大洋印刷産業(株)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-7928-0195-8 C0095

まえがき

自分の歩いて来た足跡を振り返って、自分というものがどんな人間か、その生き方をさぐり、自らの精進に資したいとして書き出したのが最初の著である「若き日の自画像」でした。

「巴里の微笑」もそんな意味から書き始めました。今次の大戦も末期の頃、画も落着いて描けずに居た中で、おのずと巴里生活の追憶が、それからそれへと湧き起こって、いつか筆も進んでこんなものを書かせたと言え、それに尽きるのです。

今からおよそ六十年前、当時の欧州は先進国としての魅力を持っていました。その見学の意欲に燃えた足かけ四年の留学生生活の偽らない体験をつぶさに書いたことに、何かプラスするものがあつたか。それは賢明な読者にお任せするとして、私にとっては約半世紀前のことが今日どういう姿で語りかけてくるか、著者の課題はそこに懸かっていると云ってもよいのです。

この本の刊行に当って、二名五良さん、新藤先生をはじめ出版記念会の方々、特に桑の実出版の関根氏、その中でも拙稿を丹念に整理して下すった鈴木ヒロ子さんには、心からお礼を申し上げます。

一九八一年 早春

小島善太郎

巴
里
の
微
笑

目
次

I ジョン・シトロン〈黄色〉

マルセーユ到着……………	3
当時のフランス……………	8
画友里見勝蔵君……………	15
日本人の画家たち……………	31
春の訪れ……………	43

II セピア〈茶色〉

巴里郊外クラマール……………	55
フェロディー家のクリスマス……………	60
ルーブルでの古典研究……………	86
佐伯祐三君のこと……………	89
不如意な滞在費……………	96
サロン・ドゥトンヌ入選……………	100

Ⅲ コバルト・グリーン〈浅緑〉

前田金弥氏パリに来たる……………	115
パリの新居に移る……………	136

Ⅳ カドミウム・プルプル〈朱赫〉

七月十四日祭（パリ祭）……………	149
ソシエテ・ドウ・フェニックス……………	158

Ⅴ カドミウム・オレンジ〈橙色〉

老婆の娘テレサ……………	175
テレサの告白……………	190

Ⅵ バイオレット・コバルト〈紫色〉

訣別……………	223
パリよ、さらば……………	248

I
ジョン・シトロンへ黄色▽



マルセーユ到着

私には暗い幼少年時代と青年前期があった。その煉獄の道を歩いて来た私は、ある年ふと、「画を描く道」によって開眼された。それから憑かれたように、まっしぐらにその道に突進していった。運命の神は、不思議によきパトロン、よき師、よき友をもって、この一人の逆境の人間を抱き導いてくれるのであった。こうして大正十年に、自分が苦心して描き上げた「四ツ谷見附」が大正博覧会で受賞したものの、自己独自のものを産み出すため、長い苦しい模索の時代が続いた。

当時洋画が日本に移植されて、なお目が浅かった。こうした時点に、こうした美術の行者たろうとする青年にとって、「巴里」というものは、まさに憧憬の的であり、聖地であった。先輩恩師の殆どがここで学び、画友の多くがここに学びつつある。ここには文化の輝く伝統があり、芸術の絢爛多彩な生々躍動する源泉があり、美の宝庫のルールブルがある。ここにはセザンヌが生きゴッホが生きミレーが生き無数の有名無名の画家達が生きた。パリこそは、美術に志す者にとって、微笑をもってさし招く美術のメッカである。

パリの私への強い聖なる誘惑は、一人の美を愛する親友の常識はずれの純真な好意によって道が開けたのである。その友の名は阿部俊男君である。一途に道を求める青年にとって不安は、物の数ではない。

一九二二年（大正十一年）九月、二十九歳の貧しい画学生は、巡礼者のような気持ちで、光るパリを指して鹿島立つのである。パリが洗面をもって迎えるか、苦笑をもって迎えるか、微笑をもって迎えるかは、神のみぞ知るであらう。

出発する横浜の埠頭には、私を送ってくれる父もなく母もなく妻もなく、ただ一緒に出発する恩友阿部君があるばかりであった。そして私の懐の財布はいと軽く、手提げの鞆には、恩師安井曾太郎先生の川口軌外君への紹介状その他が有るばかりであった。船は郵船会社建造の箱根丸（八千トン）で、九月中旬の潮風は、遠く旅立つ者の頬に爽やかであった。

その頃飛行機はなかったので、外国に渡るためには、船に頼るしかなかった。こうして船で行くので、なにしろこれからフランスの港マルセーユに着くまで、四十数日かかるというのだから、気が遠くなる思いである。上海、香港、シンガポール、ペナン、コロンボ、ジブチ、ポートサイド、そしてやっとマルセーユに着くといったその間の船中の生活は、地上との連絡は全く遮断されて、文字通り治外法権のまかり通る船中の独擅場だったから、ユートピア天国にも等しい毎日であった。船が港に入る度、石炭、水、食物補給、荷物の揚げ降ろし等で、時には三、四日も停泊する有様。おまけにそれが熱帯国を通るのだから、船客は次第に疲れてくる。それが漸く地中海に入って、翌日マルセーユに着くという朝のこと、彼方にイタリアの沿

岸が見えてきた。

永い間、熱帯の焼地ばかり見てきた眼には、岸に沿って連なる山々の緑の草木に、言い様のない望郷の念をかきたてられるのであった。

山々の中腹には、白く光る建物があちこちに散見され、壁をめぐらした城趾らしいものもあり、尖塔のある教会らしいものもある。山裾には部落らしい所や、都市らしく直線で構成された建築の集団も見える。イタリア沿岸のエキゾチックな風景、これが、欧州の先端であった。東洋とは違った風物を遙かに望みながら、甲板に現れた船客達も同じ感慨に耽るものの様であった。私はいよいよ明日着くというマルセーユを想像し、胸が踊って落ち着かないのであった。

ポートサイドが遠のくに従い、地中海特有の紺碧の海面が次第に濃緑の色を増し、同時に十一月の潮風が、俄かに肌寒さを感じさせて遙けくも来つるものかなと、思いを深めるのであった。

船がマルセーユに入ったのは午前十時頃、船客の七割が殆どドイツ行きの医学生で、同行の阿部君もその一人だったのである。当時は、医学といえばドイツ、哲学といってもドイツの時代だったのである。

入港と同時に、船内は上陸の用意で慌ただしさに包まれた。四十数日寝起きた懐かしいキヤビンに別れを告げ、ボーイが甲板に運んでくれた荷物と共に、私達は船体が棧橋に横着けされるのを待った。

白と赤で塗られた輕快な船体が密集し、黄色のマスト等の林立している港、その向こうに展開する市街、遠く丘の上まで華麗な家並みが続いている。葉を落としたプラタナスの並木、疾駆する自動車、行き来する人々、それらが今、フランスへの第一步を踏み出そうとする私を、歓迎してくれている様であった。

心細いことは、勧められたフランス語を習わず来たことで、同行の阿部君は勿論、同船客中にもフランス語を喋れる者がいないということだった。

ともかくドイツ行きの人々と一緒に、上陸することにする。幸い、船が着くと同時に、マルセーユでガイドをアルバイトにしているという日本人が見つかり、税関のことからその夜のバリ行きの切符や荷物のことまで任せ、ドイツ行きの十余名のグループに加わり、二台のタタシに分乗して市内見物に出かけた。

私は、このマルセーユ美術館のあることを全然知らなかった。もつともそこには、名画という程のものは少なく、シャバンヌの作が三、四点と、ミレーの赤子に食事を与えている絵と、あまり佳作と思えぬリューベンスの作品位が、印象に残る程度だった。

それにしても、憧れていた西洋の大家の作を、だしぬけに見せられたのだから、戸惑ってしまったのも無理からぬことであろう。

車はマルセーユを鳥瞰できる所に来た。港までが一望のもとに見渡され、四角い石を立てたような建物が陽に映えて、セメント一色に見える。その昔、この地はギリシャの植民地であったという。かつて暴君ネロがローマの市街を見下ろして感慨に浸ったときも、このような眺め

であつたであらうかと、湾の外れの城を連想させる建物を眺めながら、懐旧の情にたえなかつた。

やがて車は坂を下り、昼食をとるためにホテルの前に停つた。高いきらびやかな天井、快いオーケストラの演奏、ゴシック式の椅子やテーブル。席には、悠然とタバコを煙らす紳士、夫人やマドモアゼル達の華やかな装い。食事を運ぶ白いユニホームのギャルソン、食器の音、オーケストラのリズム。こうした異国情緒に包まれて食事をしていると、今朝この地に着いたというより、何年も滞在していたの旅先のような感慨を覚えるのであつた。

殊に目を引くのは婦人の姿で、大きくない体に目深く被つた兜のような帽子、そのかげにバツチリと澄んだ眼、整つた鼻と魅惑的な締つた口、短いスカートの下から露れた足と靴の可憐さ、軽々と歩く姿や粹な身だしなみ。パリはどんなであらうかと、怖れるような、それでいてどこか胸の躍るような複雑な気持ちにとらわれるのであつた。

ホテルを出ると、かつて船員から聞かされたことのある、日本では到底許されないような、いかがわしい所に案内された。特殊な映画館のようでもあり、不真面目な遊び場でもあつて、そこで私は、かつて冒したことのないことを強いられ、逃げ出した私をひっ捉えてまで、強制する卑劣な行為は、実に不快であつた。それはまだ純情であつた私には、耐え難い冒瀆であつた。

その日の夜行列車で、阿部君とパリに発つた。座席に腰をおろしてボンヤリ前方を眺めていると、なんとなくパリが明るく微笑んでいるように感じられるのであつた。

当時のフランス

汽車がやがてパリに着く、そう思うと興奮して眠れない。パリとはどんな所であろうか、マルセーユの街と結びつけてあれこれと想像をめぐらせてみる。同行の阿部君は冷静な細菌学者で、パリのことなどあまり気にとめてないらしく、汽車の動揺に身をまかせて心地よさそうに眠っている。車内はすいていて、同じコンパートメントに二人だけである。

汽車は深夜の平野を北に向かってひた走りに走り、町や村を過ぎる度に鳴る踏み切りの警鈴の音と、時々吹き上げる汽笛が、静まろうとする私の心を掻き乱す。

眠れないままいつしか窓外が白んできた。スチームで曇っている窓ガラスを拭いて、まだ薄暗い外を覗いて見た。素朴な石造りの家、一瞬の中に過ぎてゆく風物。あのコローやドビニーによって描かれた景色が、そのままそこにあった。

「フランスの地だ、これだ、自分が憧れていた景色は——」と、俄かに懐しさがこみあげ、自分の前世はこの国ではなかったのか、とさえ思えてくるのであった。ところがおかしいことに、あれほど楽しんでいた風景がくっきり見える頃になって、疲労は私を深い眠りの底に引き込ん

でしまったのであった。

阿部君に起こされた時、汽車はパリに着いていた。眠りから醒めたばかりの意識の中では、マルセーユからここガールド・リヨン（リヨン駅）までの間の気持の連絡が直ぐにつかず、あわてて降車した。降りた途端に、刺すような寒気に襲われ、そのために意識が甦り、パリに着いたのだという実感が湧いてきた。

列車から降りた人々が私達を後にして改札口に向かって行くのに、阿部君はしきりに誰かを探している。着いたばかりの機関車の煙突からは、まだ余煙が出ており、機関の音もしている。薄暗い構内はどことなく騒然として、ガーンという響が耳を離れない。見上げると、十丈もあるかと思われる高さに鉄骨が縦横に組まれ、鉄張りの大天井から暗い雨空が冷たそうに覗かれる。とっさにモネーの絵を想い出す。

「佐藤さんが出迎えてくれているはずだが……」と、阿部君は躍起だが、その佐藤さんが見えたらない。改札口を出てからも、人混みの中を探してみた。だが、いない。

「ともかく荷物をもってくるから」と、私を駅の入口に独り残して阿部君は、人波を縫って消えて行った。私は駅前広場の石畳に落ちる雨の音を聞きながら、眼前に展開する初めてのパリの一角を眺めていた。

広場の彼方には、カフェの看板も見える五、六階建てのビルが連なっている。それらの建物は、マルセーユで見た明るさとは全く正反対で、濁った暗い空から降る雨に濡れて、灰色に塗りつぶされたようなその暗さは、天候のせいばかりではないように思われた。傘もささず濡れ

て歩く人、走り去る黒い車、あれもこれも期待していたものとは、余りにも違っている。花の都と謳われるパリの華やかさは、一体どこにあるのだろう。温かく人の心を抱擁してくれるあの賑わいの中にすぐ飛びこめるかのような思いを抱いて、遙々訪れた私に背を向けたようなパリ、迷子が震えて泣くような言い知れぬ孤独感が、急に私を襲った。

広場の左側に停っているタクシの傍らで背の高い男が私を招いた。阿部君だった。

車は石畳の上をピシャピシャ音を立てながら、石屏のめぐらされた建物や、鉄柵に囲まれた公園を過ぎ、広場を抜けて走って行くと、やがて、雨に煙った中に一条の白く走る水面が眼に留まり、その上に架けられた雅びた橋が見えた。「パリとはきりはなせないセーヌ河だ」。河を挟んで、空をくぎって立ち並ぶ落ち着いた建物。これを望見した時、パリとは自分が気軽に夢見ていたような都ではなく、二千年の歴史の風雪に鍛えられ、磨かれて来た世界の都市だと、初めて実感されるのであった。

車を降りると、眼前にドームのある豪壮な大寺院が迫って来た。入口は鉄柵に囲まれ、奥にギリシャのバルテノン神殿を偲ばせる大理石の円柱が、並んで屋根を支え、その斜め前に、十八世紀末の服装で立っている等身大の男の銅像がある。

尋ねるホテルはその横で、ホテル・パンテオンであった。

「ムッシュ・佐藤は、パスツールの細菌学教室に行つて不在だ」という。電報が届いたのは、佐藤氏が出かけた後であったことが分かった。

二階の一室に案内され、窓を開けると、大寺院の側面が鼻先に見える。